

鳥取看護大学・鳥取短期大学

森信三の全一学と実践(1)

著者	山田 修平
雑誌名	鳥取短期大学研究紀要
号	62
ページ	1-9
発行年	2010-12-01
出版者	鳥取短期大学
ISSN	1346-3365
URL	http://doi.org/10.24793/00000084



森信三の全一学と実践 (1)

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori (1)

鳥取短期大学研究紀要 第62号 抜刷

2010年12月

森信三の全一学と実践 (1)

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori (1)

「人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早過ぎず、一瞬遅すぎない時に。」
「師の偉さが分かり出すのは(一)距離的に隔絶していて、年に一回くらいしか逢えない場合(二)さらにその生身を相見るに由なくなった場合とであろう。」何れも森信三先生の言葉¹⁾である。森信三先生との出会い、その教えに私は多大な影響を受けてきた。それも歳と共にである。森信三の生涯をたどると共に、その学問体系＝全一学と実践を考察する。

キーワード：森 信三 岡田式静座法 アカデミズム 真実は現実のただ中に 日常の実践

はじめに

森信三先生と出会ったのは、1974（昭和 49）年の秋だったと記憶する。当時大学院生であった私に大学の師の一人岡本幸治先生²⁾が「今まで出会った中で最高の傑物・真人がいる。」と紹介してくださった。政治学が専門であった岡本先生の講義は受ける機会はなかったが、風格、生き方に惹かれ、親しくさせていただいていた。森先生にお会いしたいと思った。森先生は、当時兵庫県の尼崎市の同和地区の真ん中に住み、実践人の会を主宰されていた。

実践人の会は月一回定例会が行なわれ、人生に前向きに生きたい者なら誰でも参加できた。教員、サラリーマン、OL、自営業者、主婦、タクシーの運転手、学生等さまざまな人々が参加していた。一応基本テキストを決め、輪読しつつ話し合う。話はテキストの内容から、社会、世界問題、人生全般に広がった。その一つひとつを紹介する余裕もないし、記憶も定かではない。ただ何より私が心惹かれたのは森先生のただずまいであり、日常生活の動作そのものであった。幾つかを述べてみよう。

・話を聞く姿勢

実践人の会では森先生が話されるだけではなく、

参加者も自由に発言する。参加者が多様なだけに端から聞いていて、必ずしも学びの場に相応しいと思えない言も時としてある。しかし先生は誰の発言に対しても決して分け隔てなく、柔和な態度で慈愛に満ちた眼差しをもって、頷きながら聞かれていた。

・具体的な話

森先生の話は分かりやすい。相手の理解度に合わせて具体的実践的なのである。しかもそのバックボーンには大きな理論体系、学問体系があるのだが、それを全く感じさせられない。

・日常の実践

学問体系と日常の実践が一体化している。学問体系については稿を改め紹介するが、学問と足元のゴミを拾うこと、受け取った手紙の返事はその場ですぐ書くこと等が同次元なのである。

・身体の柔軟性

座って前に足を伸ばし身体を折り曲げると、腹、胸、顔の順で足につく。当時森先生は 70 歳後半だったが身体が非常に柔らかい。身体の柔軟性と頭と心の柔軟性は関連するといえるのである。

・腰骨を立てる

常に背筋がまっすぐというより、腰骨を立てられていた。自然な形で背筋が伸び、臍下、いわゆる丹田に力がみなぎっていた。心身即応、主体的に生き

るコツなのである。

・同和地区の人々との交流

森先生から同和問題について、話を聞いた覚えはない。また森先生の多くの著書を読んだが、この問題についての記述は目にしていない。先に述べたように75歳以降、森先生は同和地区に住み、実践人の会を主宰されていた。当然地区の人々も参加される。他の参加者とのさりげない交流が始まった。学ぶことは大切。しかし交流し、実践してこそ、本当の学びということをただ黙って示しておられたと今にして思う。

・全一学

森先生の学問は分野的には一般には哲学であろう。しかし森先生の場合、単に宇宙や世界の認識学ではなく、人間学であり、実践論なのである。従ってその統合したものとして、その学問体系を全一学と自ら呼ばれていた。

その後私は、京都から鳥取に転居し、実践人の会への参加は定期的にはしなくなった。しかしそれ以降、従来にも増して森先生の著書を読み、その理論体系と日々の実践を照らしあわすとき、森先生の偉大さをより感得するようになった。

以下、敬称を略し記述する。

2. 森信三の歩んだ道

「書を読むに当たっては、体系化されたる骨格を手がかりにしつつ、その書を産み出した著書の体験の源泉に承当すべし。著者の人間に触れ、その鼓動を聞くに非ずんば、真に書を読むものとは言い難からむ。」³⁾

著書を読む場合の森の基本姿勢である。著書を理論あるいは学問体系と置き換えられるだろう。森の姿勢に学び、森の歩んだ道を振り返ることから始めることにする。幸い森は「この世への報謝として『自伝』を書くこと。随って自伝はその意味からは一種の『報恩録』ともいえよう」⁴⁾と自伝を書くことを人にも薦め、自らも書いている。また「人間形成の

三大要因(一)遺伝的な先天的素質(二)師教ないし先達による啓発(三)逆境による人間的試練」⁵⁾とも述べている。まず森の『自伝』⁶⁾を紐解きながら理論や実践の背景を主として「試練」と「出会い」をキーワードに辿ることにする。

(1) 生い立ち

森は1896(明治29)年愛知県知多郡武豊町で、端山(はしやま)家の三人兄弟の末っ子として生まれた。

祖父は第1回の国会議員でもあり、愛知県会議長を16年間務めた地元の名士であった。他方父は商店を営んでいたが、お人よしの性格が祟って1代で財産を失った。生活の困窮、父の人柄に絶望した母は子ども置き、端山家を去った。こうした家庭状況から信三は2歳の時、端山家とは縁もゆかりもない貧しい小作農であった森家に養子に出された。森の人生第1の試練であった。しかしその試練は一方で大きな出会いでもあった。養父母森種吉とはるは共に非常に律儀で、勤勉だった上に、森を可愛がった。「養父母は、わたくしに食べさせる為に鶏も飼ったし、それでも足りないとして養父は、ドジョウは身体に精がつくからといって、毎夜モンドリを仕掛けて、ドジョウを捕って来ては、それをひらいて食べさせてくれたものであって、その頃のように、以来六十余年をへだつた今日でも、尚ありありとわたくしの眼底にあるのである。」⁷⁾

養父母は単に森を可愛がるだけではなく、生き方をさりげなく森に伝えてもいた。ある夜、部落に火事があった時、火事見物の野次馬として、近所の人たちと見に行こうとした時、養父は「子どもはそんなものを見にいくもんじゃない」と諭した。以来森は、火事見物、また洪水、地震の跡など一度も見にいったことはないという⁸⁾。人の不幸を野次馬として見物することを戒めたのであろう。森は養父母のいわば庶民の善意と律儀さ、純朴さによって育まれていく。森の学問には庶民性が根底にあるのは幼少期の環境にその根があると思われる。

(2) 中学進学への挫折と岡田虎次郎

1903（明治36）年尋常小学校に入学、4年を終了後、全校生徒1500名の高等小学校に進学、成績は常に首席であった。卒業後成績優秀者の多くは中学へ進学した。当然森もそのつもりでいた。しかし森家の経済状況はそれを許さなかった。「人生において味わった最初の深刻な挫折感であって、後年わたくしの辿った人生のあゆみは、結局このときの味わった人生の寂寥感の無限の延長、ないし展開とってよいであろう。」⁹⁾ 人生第2の試練である。

進路は経済的負担の少ない師範学校へ行き、教師になることが自ずと定められた。しかも高等小学校を首席で卒業しながら、師範学校入学は年齢不足のため、叔父が校長であった母校の給仕として、時期を待つことになった。昨日まで委員長として全校生徒の前で号令をかけ、卒業式で答辞を読んだ少年・森が用務員の手伝いをしたのである。思春期の森は動揺したであろう。他方、校長秘書のような仕事をし、来客接待や礼儀作法を学んでいった。

そんな給仕時代、その後の森の生き方に多大な影響を与える岡田式静座法の創始者岡田虎二郎¹⁰⁾を知ることになる。岡田式静座法は当時雑誌等でよく紹介されていた。叔父が中心となり、森の住む町でも岡田を招いて静座の研修会が開かれていた。給仕であった森は正式な会員にはなれなかったが、岡田の指導振りを垣間見ることが度々あった。「泰山」のような岡田の威容に触れ、それを契機に、書物も読み静座の研究を始めた。「戦後わたくしが、主体性を確立する唯一のキメ手として『腰骨を立てる教育』を提唱するようになったのも、その元といえば、結局この給仕時代に、岡田先生に接したから」¹¹⁾ であるという。

(3) 三浦渡世平と三浦修吾

森は給仕1年、代用教員半年の後、愛知第一師範学校に進学、校長三浦渡世平の風格に無限の感化影響を受けた¹²⁾。三浦は徳川幕府の御家人の出で、気宇宏大、質実剛健、責任感に富む実践的な教育者

を養成する教育を行っていた¹³⁾。森は寄宿生活をして、教室で学び、古本屋をめぐり、読書をし、時として冒険、また新聞に投書をしたりして4年間の師範学校の生活を送り、ここも首席で卒業する。森は母校への奉職を希望したが、意に反して西三河の横須賀小学校に赴任する。この時期、森は三浦修吾¹⁴⁾の『学校教師論』を読む。森は以前より三浦の論文が雑誌にでることに注目していた。その体系だった書物が出版されたのである。森が三浦修吾の教育思想に惹かれるのは、「死・生の境を越えてこられた為に、つねに宗教がその背景になしているが、しかもそれは毫も既成宗教の臭味や形骸はなくて、つねに人生の生き方というものが全巻を貫いた」¹⁵⁾と記し「この『学校教師論』は、生涯の方向を決定した書物」¹⁶⁾と述べている。

三浦校長また『学校教師論』に影響を受けた森は、雑誌の懸賞小説に応募（1等当選）したりしながら、小学校の教師としての一生を考えていた。

しかし、森の学才を惜しむ友人の勧めや親戚、篤志家の好意で、1年半の小学校教員生活を過ごした後、広島高等師範学校に進学することになる。その学資は、当初の2年は親戚の山口精一、後の2年は鳥居信二（サントリー社長）の匿名の好意によるものであった。

(4) 福島政男、西晋一郎、西田幾多郎

当時の広島は物資が豊かで、気候もよく、軍部の影響も少なく、したがって広島高等師範学校の「先生方としても、じっくり落ち着いて研究をせられる余裕があったと共に、また師弟の情合も、濃まやかなものであった。」¹⁷⁾ こうした学園の雰囲気の中で森は多くの師に出会うが、最も影響を受けたのは福島政男と西晋一郎である。

森は福島の講義を聴いたとき「初めて魂の底まで沁み透る思いがした」¹⁸⁾、「生まれて初めて内省への導きを頂いた」¹⁹⁾という。浄土真宗を信仰する教育者。福島を通して親鸞、またペスタロッツヘ森の眼は開かれていった。

森は福島で講義を高等師範の2, 3年に、3年、4年で西の倫理学の講義を受講する。ただ「在学中は、先生の深遠な思想については理解しえないで、大学へ行った初めて多少先生が分かり出したという遅鈍さであった。」²⁰⁾と述懐するが、森は後に西の影響を受け近江聖人といわれた中江藤樹に惹かれていく。

広島高等師範を卒業後、大阪の旧制高等女学校の教師になる。森は大学進学を希望していたが、当時は高等師範からすぐに大学には進めず、1年間就職をする義務があったためである。森は女学校の教師を勤めながら、当時傍系の学校からの入学に排他的であった京都大学進学のための受験勉強をした。1年後、京都大学の哲学科に入学する。1923(大正12)年、森26歳であった。そして3年次より高名であった西田幾多郎に師事する。西田の講義は「色々な学説を並べて、説明されるようなことは、嘗てあったためしがないところか、論理そのものも、すでに出来上がって凝固した体系の説明ではなく、一語一語コトバが語られると共に、そこに生きた生命の論理が生み出されるという調子のものであった。」²¹⁾

こうして当時、西に西晋一郎、東に西田幾多郎と称されていた両巨頭に「倫理学」と「哲学」を学び、学問の土台固めをしていった。しかし一方で森は京都大学入学の間もない頃から「わが国のアカデミズムに対する一脈の不信と、それについていけない自己を見出していた」²²⁾。

その理由を森自身、両親の離婚、一小作人によって育てられた環境、非エリートの経歴、福島の影響で知った親鸞、西に触発された儒教及び禅の一端に触れたためかも知れないと述べている²³⁾。

(5) 在野の思想家群

大学で学ぶ傍ら森は在野の思想家、実践人たちとの交流を深めていく。その代表が沢木興道和尚であった。当時沢木和尚は世間的には無名であったが、京都大学の一部の教官や学生は「宿なし興道」と称せられた沢木の話に興味をもっていた。森もその一

人であった。沢木は道元禅師の『正法眼蔵』、慈雲尊者の『人なる道』、『学道用心集』等を講本に用いたが、「話は徹頭徹尾具体的であって、随所に何ともいえぬ適切な比喩が続出したもの」²⁴⁾であった。森は沢木を通し、禅の世界に開眼していく。

森はまたこの時期真の人生の友というべき人に出会う。福田武雄夫妻である。「福田武雄氏夫妻は、当時未解放部落の小学校に勤めていられ、夫君は終生その途に歩まれ、また夫人のほうは、後に京都府立盲学校に転じられ、盲教育のためにその後半生をささげられた世にも稀れな『教育妙高人』」²⁵⁾だったという。

森はこうした人たちとの交流を通じ、宮崎童安、伊藤証信、新井奥遂といった社会的には地位もなく収入もないが真剣に真理探究に励んでいる人を知る。そうしたかかわりの中から、二宮尊徳、中江藤樹、石田梅岩といった江戸時代の実践的思想家に惹かれていく。

こうして森は「一方ではひたすら論理の厳正を追及して、日もこれ足りないといったアカデミスト達と、机を共にしながら、他の反面には、こうした浪々と定取もない身を以って、しかも一路端的に求道のみちを歩んでいる、いわゆる『在野の思想家』達を知ったのであって、わたくしとしてはこれらの人生の生き方の両極の間に、自らの一路を拓きたいと念じた」²⁶⁾のである。

(6) 天王寺師範教員時代

1926(昭和元)年、京都大学哲学科(本科3年)を首席で卒業、大学院へ進学、同時に大阪の天王寺師範と女子師範に奉職し「哲学」と「倫理」を講義することになる。またこの時期に結婚する。31歳の年である。

両校の在任は13年に及ぶが、前半は大学院に席をおいた非常勤の講師時代であり、後半は専任教員時代である。

森は「哲学概論」や「哲学史」等単に知識を教える講義は好まなかった。テキストには恩師の西田と

西各々の処女作『善の研究』、『倫理哲学講話』を用いた。両書とも哲学と倫理が渾然一体と為していたが、森自身それが学問の理想だと考えていた²⁷⁾。

また森は講義にあたって難解な哲学的術語をできる限り日常的な言葉に置き換え説明した。それでも初めて哲学を学ぶものには不十分だと考え、毎授業時間の初めに6、7分とって人生の具体的な諸問題を取りあげそれを分析し、そこに含まれている人生の具体的な真理を知らせるようしたという。こうした経験から、森は「学問には『自内証』としての自証と、『化他』の作用としての啓発的な2つの面がなければならぬ」²⁸⁾ことを悟り、それが森の学問を貫く1つの特徴となっていく。

この時期大学のアカデミズムと在野の思想家群に両足を置いていた森は一冊の本『二宮翁夜話』の冒頭の言葉との出会いにより、学問のあり方を開眼する。「『それはわが教えは書籍を尊まず、ゆえに天地をもって経文とす。予が歌に“音もなく香もなく常に天地は、書かざる経を繰り返しつつ”とよめり。かかる尊き天地の経文を外にして、書籍の上に道を求むる学者輩の論説は取らざるなり云々』。と同時にこの一語によって、大学入学以来抱いてきたわたしの永い間の迷いは潤然として氷解した」²⁹⁾。「真理は現実のただ中にある」という森の生涯の学問観が確立したのである。現実世界の中の真理は決して書物の中にあるのではなく、日々移り変わる実世界のなかにあるという信念である。また「人生2度なし」の根本信条に開眼する。ここに森の学問は純粹理論体系と共に実学的要素という両面性をもつことになる。

1932（昭和7）年処女作となる『哲学叙説』を、1935（昭和10）年処女作を進化展開した『恩の形而上学』を執筆。1937（昭和12）年『学問の方法論』を刊行する。何れも独創的且つ壮大な理論体系をもつ著書である。

関連して触れておく必要があるのは学位論文についてである。1935（昭和10）年頃、恩師西より学位論文執筆の勧めがあった。森は初め固辞したが再

三の勧めで書き上げたのが先の『恩の形而上学』である。ところが「学位論文というものは、思想の独創性よりも、その人がどれほど多くの書物を読んでいるかを証明するものであり、随って博引傍証しなければならぬ」³⁰⁾と指導を受ける。しかし森の学問観、少なくとも哲学という学問は、他人の紹介や模倣ではなく、自分自身の創造的な思想体系を打ち出さなければならないという信念の下、博引傍証を極力避けてきた。森は学位論文の提出を辞退した。

他方、天王寺師範の生徒たちへ「修身科」の授業を生徒に筆記させた講義録が、当時教育界で高名であった芦田恵之助³¹⁾の目にとまり『修身教授録』（全5冊）として刊行される。この『修身教授録』は10万冊出版というベストセラーになり、後の全国教育行脚の縁ともなり、25巻の全集出版の下地ともなった。

(7) 建国大学赴任と敗戦

大阪師範13年間の勤務の後、西の推挙、作田壮一副総長の懇望により、満州の建国大学創立と同時に教授として赴任する。森はここで「精神講話」、「哲学概論」、「東方哲学」等を担当する。他方、作田の強い要望で塾頭さらに教務課長も兼任した。

ところで建国大学の設立の意図は「将来満州国の中堅指導者になる人物の養成にあった」³²⁾。そのため「当時満州国を構成していた各民族から、俊英を一同に集めて、『民族協和』の建前にあたって、有意の人材をしようとした」³³⁾。しかしその前提となる満州国は、日本の植民地政策により作り上げられた軍部の傀儡政権だった。森は後に「然るにそれが、単なる幻影として、一場の夢のごとく崩壊した今日となってみれば、そこに冷厳なる世界史の進行を洞察しえなかったわれら民族が、一瞬心に描いた自己中心的な果かない理想の投影だったという外ないが、当時まだ社会科学の先例をうけていなかったわたくしにとっては、このような洞察は全く夢にもできなかったわけである。」³⁴⁾と述べている。

当時「自己中心的な果かない理想の投影」とは夢

にも思っていなかった森は、満州の地で一生を過ごす決意で、建国大学で誠心誠意、講義に、学生指導に、管理職としての職務にあたった。

1945（昭和20）年、日本は敗戦という形で終戦を迎える。森、建国大学勤務7年、48歳のときである。敗戦の混乱の中、森はまさに九死に一生を得て帰国するが、帰国にあたっては森らしいエピソードが幾つかある。

終戦の前日8月14日、森は出張先で日本の敗戦をいち早く耳にするが、人より早くその情報を早く知ったからといって、学徒動員先で長男を尋ね対面までしながら、わが子だけを連れ帰る行為は遠慮し、不穏な空気の中、大学のあった新京へ帰着する。

そこで建国大学から分担して引き取った3人の日本人留学生と粗食で飢えをしのぎながら、読書三昧で日々を過ごす。そんな折、戦争犯罪人の追及ということでソ連軍から呼び出しを受け、取調べ拘禁6日間、シベリヤ送り寸前というところで意外にも釈放宣言される。通訳が森に「先生！この動乱の中ですが、どうぞ身体を大事にして研究だけは続けてください」³⁵⁾と声をひそめていった。驚いてその通訳をよくみると、かつて建国大学で教え、しかも中途退学をした白系ロシア人の青年であった。森の教員としての誠実さが森を救ったのである。しかし釈放には「週に2回くらい来て、隠れている日本人の軍人や警官を密告せよ」³⁶⁾という1つの条件がつけられた。後に判明したのだが森の周辺には密告をして助かった人、密告で逮捕された人がいた時代である。森は人間として断じて「密告」はしたくないと考えた。さりとて「シベリヤ送り」は死を意味する。新京を脱出する他ないと決意する。泣いて同行を願う留学生1名とリュックサック1つを身につけ、ソ連兵の厳しい監視の目を逃れ、現地人の嫌がらせを受けながら脱出の旅を続ける。外気温下20度、凍餓死者を横に廃屋で過ごしたり、大道易者の真似事をしてわずかな金銭を得たりして10カ月。まさに「死線」を越え、舞鶴の地に帰国したのは1946（昭和21）年6月7日、森49歳のときである。

最大の試練を経験したのである。

(8) 帰国と浪人時代

敗戦の混乱の中で離れ離れになっていた妻と子三人は幸い一足先に無事帰国していた。妻の実家は甲子園にあり戦禍を免れていた。森は妻の実家で生活を始めたが、自身の過去を振り返り、点検し、自省するため就職の依頼はせず、衰弱しきった心身を癒すと共に、読書と思索そして「作歌三昧」の日々を送った。森は作歌について「ひとつの新たな思想が生まれる前には、その内容がまず詩歌の形で、直感的にその表現が迫られるのが常」³⁷⁾と述べている。読書の中に歴史、経済といった社会学関係の書物が含まれた。また就職しないということについては「一種の『自己追放』だと、われとわが心に言い聞かせたのであった。」³⁸⁾森の戦争に対する思いの1つの表れであった。

そうした思索、反省の中から、日本を敗戦のどん底から再生させるには教育、とりわけ人間づくりの基盤としての家庭教育について説く必要性を痛感する。その思いは『開頭』（かいげん）、『親と子』という2つの雑誌となって具体化する。開頭という言葉は法華経の言葉だが、森はこの言葉に惹かれた。意図するところは「宇宙の根本本質の開頭を意味する、（中略）、そこに今回の敗戦の深義があると考えられた」³⁹⁾と述べ、教育再生の道、人間の生き方について説いた。『親と子』では家庭教育の重要性と共に具体的なあり方についても述べている。さらに森は自分自身の戦前の思想上の根本的な誤りは、「民族神観」であったとし、その超克を意図した叢書『国と共に歩むもの』（全5巻）を企画、発行する。また「神話」ではなく「科学」に基づく合理的な考え方を子どもの頃から養うことの大切さを考え、『子供と科学』を出版社の依頼を受け発刊する。順調に思えた出版活動が森に思わぬ不幸を招くことになる。森の妻が代表を務めていた開頭社の販路を『子供と科学』の出版社が犯し出したのである。その対抗のため『少年の科学』を開頭社から出版する。し

かし『少年の科学』は悲劇の雑誌となる。内容的には『子供と科学』となんら遜色のないものであったが、子供に関する「科学」関係の雑誌が当時並存する社会的余裕がなかったのだろう。プロの出版社に太刀打ちできるわけもなく、極度の売れ行き不振に陥り、森は多額の借金を背負うことになる。発行責任者であった森の妻は、心痛のあまり精神異常になり入院する。また森自身もノイローゼに陥り、時には神経的発作が起きるようになり、自殺さえ考え死処を求めてさまよったという。なにより耐え難かったのは、律儀さ、誠実さ、信用を最も大切にする森にとって、森の雑誌を楽しみにした全国の善意の協力者や代金を前納した子どもたちを結果として裏切ることになることであった⁴⁰⁾。

苦悩の末、森は妻の実家の家屋敷（森の次男が養子跡継ぎになっていた）を処分し、とりあえずの負債を返済すると共に、兵庫県の教育委員会に知人を訪ね生まれて初めて就職の依頼をする。

(9) 篠山農業大学校講師，神戸大学教授時代

紹介されたのは当時設立予定であった兵庫県立農業大学校の「英語」担当の講師としての職であった。当然教育学関係の科目を担当するものだと思います、その準備をしていた森の期待は外れた。しかし森は「英語」の授業も誠実に行なった。生徒のなかには高等学校で全く英語を教わらず入学してきた学生もいたので、その学生らに森は昼休み等を利用して補習授業もした。また学外読書会等校務以外にも町の人々との交流を大切にした。この時期、従来より趣味のあった石とそして雑草に一層惹かれていく。篠山の田舎道にころがっている何気ない石の美しさ、路傍に咲いている小さな雑草の可憐さに当時、森の置かれていた「憐れな姿と通じるものを認めていたからであろう。」⁴¹⁾と後に述べている。

誠実な勤務、人々との交流、しかし心底ではわびしさを感じていた森に思いかけず神戸大学から招請があった。当時同大学教育学部長であった塩尻公明が森の著作に注目をし、教授陣の充実のために森を

招いたのである。1953（昭和28）年、森56歳であった。

教育学部の教授となった森は「哲学」や「倫理学」ではなく「教育学」を担当する。

森は定年までの7年間「『教育』と『著述』と『旅』という三本建ての道を、寸暇を惜しんで生かすようにと努力した」⁴²⁾。森の講義を聴講した当時の学生は「聞く者の心を根底から揺さぶるような気迫のこもった授業でした。」「単なる大学の講義の趣を越えた、まさに森先生の説かれる『生命の呼応』を生み出すものがあったように思います。」⁴³⁾と述懐する。

雑誌発行で物心両面に多大な痛手を負っていた森であったが、表現意欲は衰えていなかった。神戸大学在職中に『教育的世界』とその姉妹縁ともいべき『教育的実践の諸問題』を執筆する。森の著作は多数あるが『教育的世界』は教育学についての最初の著書であり、「自身の教育哲学として、とくに教育作用の位置づけを眼目におきつつ、他面『教育原理』をも兼ねさせた」⁴⁴⁾ものであった。森は自身が著述すると共に、身近な教育関係者にも著述を勧めた。実践と研究・著述の両面の必要性を説いたのである。

旅については、全国各地の学校現場を訪ね実情視察と講演を行なった。森の徹底した実践、現場主義の表れといえよう。

日常的な実践については、講義前に黒板をきれいふき取り、講義後さらに黒板をきれいにしてから教室を離れた。さらに学内の落ちている紙くずを人知れず黙々と拾い続けた。

(10) 神戸大学定年退職後

1960（昭和35）年、森63歳で神戸大学を定年退職する。「人は退職後の生き方こそ、その人の真価だといってよい。退職後は、在職中の三倍ないし五倍の緊張をもって、晩年の人生と取り組まなければならぬ。」⁴⁵⁾と森はいう。

退職後の森の活動は、全国教育行脚、執筆、実践人の家に集約できよう。

森の旅＝教育行脚の機縁をつくったのは、記述したように『修身教授録』の出版であった。この著書を読み、森の教育論、人生論を直接聞きたいという人々の期待に応えて旅をし、講演をしたのである。教育行脚は帰国後、意識的に行なわれ、神戸大学教授時代は生活の一部となり、退職後は一層拍車がかかった。北は青森県から南は鹿児島県まで、年間200日以上、帰国後延べ講演回数約1万回に及んだ。森の場合、ただ単に講演をするというだけではなく、学校を視察し、下駄箱の靴の並び方、校長室の机の大きさ、位置、応接セットの配置まで指摘すると共に、学校の優れた取り組みに謙虚に学ぶというまさに助言、指導、研修の旅であった。さらに多くの人々と交流し、これはという無名の真人を次々と発掘し、全国に紹介する。森の人を思いやる慈愛とその慈愛に裏付けられた人間の真価を見抜く力の現れであろう。

執筆に関しては、1968（昭和43）年、森71歳のとき、『森信三全集全25巻』を編纂、その後『幻の講話』、『全一的教育学』、『森信三全集 続編全8巻』を刊行した。また縁ある人々に『自伝』、『教育実践記録』、『一人雑誌』などの出版を勧め、求められれば、推薦をかねた序文を書いている。その数270篇を越える。しかも驚くべきことに、こうした執筆活動より優先して行なっていたのが、受け取った手紙、はがきの返事書きである。森はいかに多忙で、やるべき仕事があったとしても返事は間髪いれず書いた。書物以上に必ずお互いに読み合い、伝え合う手紙、はがきを大切にしたのである。

またかつての雑誌『開頭』を引き継ぐ形で月刊誌『実践人』は神戸大学教授時代に創刊し、発行し続けていた。『実践人』の読者は日本全国に広がり、その要望に応える形で、実践人研修会が年2回実施された。この会には森の教えを直接受けることを求め、また同友との交流を楽しみに老若男女を問わず多くの人々が集う。

1972（昭和47）年、長男が急逝する。この長男の死を契機に同和地区に居を構え、独居自炊を始め、玄米自然食、挨拶、紙くず拾いを勤めとした。また

味噌汁会、とろろ汁会と称する読書会、勉強会を開催した。

こうした中で、『実践人』を読み、森を慕う全国の人々から研修所設立の機運が起こり、実践人の家が設立されることになる。1975（昭和50）年、森78歳のときである。翌年には実践人の家は社団法人の認可を受け、全国の実践人の研修の拠点になった。森は実践人の家で独居自炊を続けると共に、訪れる人々に誰一人分け隔てなく、愛顔、愛語で対応し、人々を励ますと共に、人と人との絆をつくっていった。

またこの間1965（昭和40）年、海星女子学院大学4年制開始に当たって乞われ教授に就任、1982（昭和57）年、85歳まで勤務している。

1981（昭和56）年、脳血栓で入院するが、復帰、しかし1983（昭和58）年再入院、その後三男宅で療養する。1992（平成4）年11月21日逝去。享年96歳。

森の死後も、実践人の家は運営され、『実践人』は発行され、実践人研修会も実施され続けている。

次稿において、上記のような歩みの中で体系付けられた森の哲学＝全一学と教育的実践を考察する。

参考文献

- 1) 森信三『恩の形而上学』森信三全集第一巻、実践社、昭和42年2月
- 2) 森信三『自伝』森信三全集第二十五巻、実践社、昭和42年9月
- 3) 森信三『修身教授録』、竹井出版、平成元年8月
- 4) 寺田清一編『森信三先生一日一語』、実践人の家、昭和52年11月
- 5) 寺田清一編『森信三先生全一学ノート』、実践人の家、昭和54年3月
- 6) 村上信幸『人生二度なし—森信三伝—』、実践人の家、(株)タニスケ、平成14年7月
- 7) 実践人の家『森信三先生の生涯』、実践人の家、平成17年8月
- 8) 山懸三千雄「森信三の日本的正気と心実学と教

育的实践』『日本人と思想』, 創文社, 昭和 49 年 8 月

注

- 1) 寺田清一『森信三先生一日一語』, 実践人の家, 昭和 52 年 11 月, 2 月 23 日及び 2 月 21 日の言葉, 33 ページ及び 32 ページ
- 2) 1936 年生まれ. 民間会社勤務の後, 京都産業大学, 大阪府立大学, 愛媛大学教授等歴任. 現在は大阪国際大学名誉教授. 著書には『脱戦後の条件』, 日本教文社, 1995 年. 『インド亜大陸の変貌 1900-2000』, 展転社, 2004 年等多数ある.
- 3) 森信三『修身教授録』, 竹井出版, 平成元年 8 月, 507 ページ
- 4) 前掲『森信三先生一日一語』, 11 月 29 日の言葉, 198 ページ
- 5) 同上, 12 月 13 日の言葉, 208 ページ
- 6) 森信三『自伝』森信三全集第二十五巻, 実践社, 昭和 42 年 9 月
- 7) 同上, 16-17 ページ
- 8) 同上, 22-23 ページ参照
- 9) 同上, 58 ページ
- 10) 岡田虎二郎 (1872-1920 年). 高等小学校卒業後, 農業に従事. その後人間の心身開発を志向し, 30 歳で単身渡米, 3 年後帰国, 人間本来の自然体系と呼吸法を基とした静座法を創案. 当時静座法に帰依する者 1 万人に及んだ.
- 11) 前掲『自伝』, 74 ページ
- 12) 同上, 95 ページ参照
- 13) 同上, 96 ページ参照
- 14) 三浦修吾 (1875-1920 年). 福岡県出身, 小学校主事, 師範学校勤務後, 成蹊学園の機関誌『新時代』の編集主任を務める. 主な著作に『学校教師論』, 1916 年, 『第二里を行く人』, 1919 年, 『生命の教育』, 1926 年がある. またデ・アミーチスの『クオレ』を翻訳し, 『愛の学校』として出版. クリスチャンであった.
- 15) 前掲『自伝』, 123 ページ

- 16) 同上, 124 ページ
- 17) 同上, 146 ページ
- 18) 同上, 146 ページ
- 19) 同上, 148 ページ
- 20) 同上, 152 ページ
- 21) 同上, 174 ページ
- 22) 同上, 176 ページ
- 23) 同上, 177-178 ページ参照
- 24) 同上, 179 ページ
- 25) 同上, 180-181 ページ
- 26) 同上, 182 ページ
- 27) 同上, 189-190 ページ参照
- 28) 同上, 191 ページ
- 29) 同上, 192-193 ページ
- 30) 同上, 216-217 ページ
- 31) 芦田恵之助 (1873-1951 年). 小学校の代用教員から東京高師附属小学校訓導となる. 樋口堪次郎に学び, 綴り方教育を提唱. 公職を退いた後は全国教壇行脚をして実践教育を続けた. 主な著作に『綴り方教授』, 『恵雨自伝』等がある.
- 32) 前掲, 森信三『自伝』, 226 ページ
- 33) 同上, 227 ページ
- 34) 同上, 227 ページ
- 35) 同上, 270 ページ
- 36) 同上, 271 ページ
- 37) 同上, 304 ページ
- 38) 同上, 306 ページ
- 39) 同上, 308 ページ
- 40) 同上, 322 ページ参照
- 41) 同上, 329 ページ
- 42) 同上, 353 ページ
- 43) 村上信幸『人生二度なし—森信三伝』, (社)実践人の家, (株)タニスケ, 平成 17 年 7 月, 66 ページ
- 44) 前掲『自伝』, 347 ページ
- 45) 前掲『森信三先生一日一語』, 3 月 28 日の言葉, 53 ページ